リレー連載

「いじめ」に思う

―もんもんとする日々の中で　2／3―

吉成　タダシ（ストーリーライター）

クラスがもっともっと深まった

「この体育祭で、特に感動したのは、長縄です。マユが跳ぶのを嫌がっていました。今まで練習のときは一回、二回と跳べていたのに、本番になれば跳べなかったというのは、その気持ち私にも分かるような気がします。もし私がマユの立場だったら、私だってそうしてしまうかもしれません。マユだって必死でみんなに迷惑かけまいと、『跳ぼう！跳ぼう！』と自分に言い聞かせていたと思います。最後の体育祭がこんなに素晴らしいものになるとは思ってもみませんでした。こんな機会があって、三Eがもっともっと深まっているような気がします。」

「体育祭で心に残ったことは、やっぱり縄跳びでした。みんな練習し、頑張ってきたので、精一杯跳びたかったです。初めのころは、マユの行動にちょっと嫌だったけど、先生が『棄権します』と言ったときは、『どうして？なんで？』という気持ちでした。そのとき先生に、『歯がゆいと思うなら、今できることをしろ！』って言われて我に返り、私はマユのところに行きました。するとみんな泣いていて、私ももらい泣きしました。二回目は、ちゃんとマユが跳べるように元気づけたかったけど、やっぱりマユは二回目も跳べませんでした。やっぱり三年E組は、一人でも欠けたら三年E組でないので、みんなで跳びたかったです。また学活のときにでも、三年E組のみんなで長縄を跳びたいです。その時は、マユも一緒に跳んでくれたらいいなぁと思いました。」

「体育祭という三年生最後の行事が終わりました。体育祭を迎えるまでにいろんなことをしましたが、クラス全体で協力できて、一つになれたような気がした全員縄跳びが、一番心に残っています。初めて縄跳びをしたとき、五回跳べました。この五回は、跳べなくて何回もこけて、何回もやめようとしたマユをみんなが励ましながら、全員が一つになって跳んだ五回でした。だけど、体育祭の当日、一回目は棄権、二回目はマユが抜けて跳ぶことになり、一回しか跳べませんでした。あのときに先生が言った、『全員で一回でも跳んだらE組の優勝！』の言葉が、すごく心に残っています。マユを励ますクラスの仲間も私も泣いていました。あの時、他のクラスの子や見ていた人たちはどう思っていたのでしょうか。私は二回目を跳ぶとき、見ていた先生たちが『頑張れ！』『落ち着いて集中しろー！』と言ってくれた声を、今でも思い出せる気がします。あの時、全員で一回でも跳べていたら、練習で回数が増えたときより何より、嬉しかっただろうと思います。」

大切なことを教えられていた

「体育祭では、縄跳びが特に心に残りました。マユは毎時間「いや！」と言ったり泣いたりしていました。それを見ていて私は、マユに何ができるのだろうと思いました。マユに『今度は頑張ろう！』と言うと、『頑張る！』と言ってくれました。けれど結局、体育祭の縄跳びの時、マユが泣いてしまいました。みんながマユを励ましたりしているのが目につきました。その中で私は、大切な何かを見つけたような気がしました。私はマユと生活してきた中で、マユがいたことによって、いろいろと大切なことを教えられてきたような気がします。マユがいなかったら、きっと分からなかったと思います。今回のことで、あらためてマユも大切な友達の一人だと実感しました。」

クラス全員でもう一度

「私は、体育祭で長縄をクラス全員で跳びたかった。みんなですることによって、何かができてくるような気がしたから。だけど、マユが一緒に跳んでくれなかった。長縄の練習いっぱいした。だけど一度も跳びたくないとは思わなかった。何か楽しかった。マユは練習のとき、何回か泣いたことがあった。でもその度に、マユは『ごめんね、今度からは頑張って跳ぶから』と言ってきてくれたので、私は嬉しかった。その言葉通り、頑張って一緒に跳んでいた。『頑張ってみる』とも言ってくれた。だから一緒に跳んでくれると思っていた。だけどマユは、泣いて跳ばなかった。私は、何か悲しくて、涙が出てきた。結局マユは跳ばなかった。一回跳んだけど、マユと一緒にできなかったから、全然嬉しくなくて涙は出てくるばかり。マユが跳んでくれなかったのには、私たちに責任があると思う。私たちに力がなかったのだと思う。今年の体育祭はずっとずっと私の心の中に、みんなの心の中に残ると思う。私はクラス全員でもう一度長縄を跳びたい。今跳ばなきゃ後悔するし、何もかも始まらないような気がする。ずっと心の中でうじうじするのはイヤです。『えー』なんて言う人を私は許さない。絶対に。そんなことを言う人は、このままでいいの？私はこのままじゃイヤです。マユも含めてクラス全員で跳びたい。跳ばなかったのがマユじゃなくても、誰であっても私は絶対にもう一度跳びたい。私はマユの意見が聞きたい。今どう思っているのか聞きたい。私はこのまま時間が過ぎていくのをずっと見ているのは我慢できません。今からでも遅くありません。全員で跳ぼうよ。それをすることによって、今まで以上に協力し合えるし、クラスのみんながもっともっと仲良くなれるような気がする。」

たかが長縄跳び、体育祭の一種目です。

私は、様々な人権問題についての学習はしてきました。しかし、特別な支援の必要な子どもへの学習を取り立ててしてきたわけではありません。それでも、子どもたちは、そうした学習を通して、人とかかわることの喜び、人の気持ちを慮ることの大切さを、豊かに育んできたのではないかと思うのです。そんな姿に学ばされたのは、私自身でした。そして、この話には、事後談があります。（続く）

イラスト　中島　亜唯